

殿の前へ醜膳一疎末には候へど自ら
心用ゐて毒味いたさせ候へば御心おき
なく召上り候へど、恭しく挨拶して引
退く間もなく若殿にのかねて源左衛門
友見の兩人より申含めまゐらせたるこ
とあれば紙に腹痛いたし候へば失禮の
段に死ど長慮ぬし夫婦に暇をつげ今暫
時くと花里が留むる言を聞流しそのま
ゝ立つて西の殿へ歸館ありしかば花里
の豫て用意の毒殺の計に更なり途中
に待受暗殺する第二の策も時刻早けれ
ば全く齟齬し頃來の辛苦も忽ち水の泡



となりければ只管若殿の高選を嫉みしが此う迄に巧みし事を此まゝにして止むに如何にも
遺憾し、と執念深くもその膳部を後より西の殿へ贈りやりける情も若殿の何の恙もなく
て歸館ありしかば後室にの甚く喜び給ひ毒蛇の頸と死れしと此事ならん是然しながら
原加藤の忠勤に依る處なりと頻に兩人の功勞を慰勞ひ給ふところへ表御殿より膳部を贈來
りしかば直に加藤友見をしてその膳部を檢査させ給ひしに果して毒藥の加味してある事を
發見せしかば源左衛門の大きに驚き過日の菓子といひ今日の膳部といひ最早このまゝ、内分
にのすませざなければお表へ披露して公平の所置に及ばんと顔色變て憤るを後室にの向
も押止め此事妾の考へにの長慮ぬしの知り給ふ事にのあらず全く花里が第を無きものにし
自己の所生子祿三郎に岡部の家名を相續させんの奸計に紛れなされば花里さへ暇をいだ
させ夫迄のこと家老野村多仲と密に語ひ此事内分にて花里と退るやう穩當の計らひをせ
ようしとかゝる時にも動じ給ひぬ最も賢く仰せどに源左衛門の且恥且恐入やがて多仲
の宅にいたり事云々と語出後室の賢慮をも告げ、れば多仲の内に駭き後室の仰せの如く此